

## 愛・障害者

宮 兆 芳  
GONG ZHAO FANG

ある出来事があってから同じ夢を何度も見ました。私が夜深い眠りに入ると、星も月もない真っ暗な夜に弟が一人で地面を這っている夢です。目が覚めると涙で枕が濡れていました。今迄障害者の事を他人の様に思っていた私が、これからは目の前の現実と向き合っていかなければいけないという一つの現れであった様に思われました。

その出来事とは、昨年四月に中国の母から電話があり、弟が事故で腰を強く打ち下半身麻痺になってしまい、医師からは治る可能性はゼロに等しいと宣告されたという連絡でした。それを聞いた私は、大切な弟が一生車椅子で過ごさなければいけないという現実が頭の中を駆け巡りました。その日は私にとって生まれてから一番辛い日になってしまいました。明るい性格で明日への希望に満ち溢れていた弟が、今では毎日一人で自分の部屋に閉じ込めり、パソコンが唯一の友達といった暗い日々を送っていると知り、とても悲しい気持ちになりました。私は弟を励まそうと、外に出掛けてはどうかと問いかけてみました。直接体が自然を感じれば自分の気持ちが少しは良くなるかもしれないと考えたからです。でも弟から返ってきた言葉は、自分を見る人の目が障害者を哀れみの気持ちで見ている目に見え、もっと自分に劣等感を持たせるだけと、私には思いもよらない言葉でした。弟の心がこんなにも歪んでしまっているのかと驚き、後の言葉が出ませんでした。

そんなある日の事です。私は買物の帰り道で停まっている車の中に若い男の子がいるのに気付きました。近くに車椅子が置いてありその子が障害者である事が私にはわかりました。車椅子を移動する為に一生懸命立ちとうとする姿を見て自然と体が動き出している自分に気付きました。彼が弟と重なり何とかして助けてあげたいという気持ちでいっぱいになっていたのです。ところが、彼の目を見た瞬間、私はその瞳から逃げ出してしまいました。なぜなら私に対する不信感が彼の目を見て理解できたからです。この時、障害者に対しての接し方の難しさを痛感させられ、今後弟と向き合っていく事の大変さを実感しました。

私の弟が事故から一年経っても人前に入る事を恐がり、前向きに生きようとしません。私の目を見た日本の障害者達も弟と同じ様に心の壁があるのではないのでしょうか。だから私達が優しく暖かい目で見守る事で、私達との距離感が無くなると考えます。

今、日本にいる私は、弟を直接手助けする事は出来ませんが、今後は日本で障害者の為のボランティア活動があれば積極的に参加し、少しでも障害者の心を勉強する事で、きっと弟にも希望が訪れる様な気がしています。「冬の後には必ず暖かい春が来る」その言葉を信じ、中国にいる家族と弟の幸せを願い、今後を見守っていきたいと思います。